

喜びの叫び

(詩篇 100・1〜5)

一、詩篇100篇はどんな詩篇？

詩篇100篇から聴き取るために、第100篇がどのような詩篇であるかを、まず外側から眺め、次に本文に入って行きたいと思います。ご存じのように、詩篇は全部で150篇あります。これだけの分量ですから、元は五巻から成っていました。今は、書物はコーデックスという紙を綴るタイプのものになっていますが、昔イスラエルでは羊の皮をなめて巻物にし、そこにペンで書いて行くという方法を採用していました。当然のこと、あまり長くはできません。そういうわけで、詩篇の第一巻と第二巻は、ひとまとまりの詩篇として編集されましたが、巻物は長さに限界があったために、二巻に分かれたと思われま。その、第一巻と二巻が詩篇第1篇から72篇まで、〈タビデの祈り〉として編集されました。そして、第二巻に続く第三巻は、かなりの年月が経ってから編集されたと思われま。と言いますのは、第三巻は非常に衝撃的な内容の詩篇を含んでいるからです。第三巻を締めくくる89篇は、神が、神に油注がれた者メシアを拒んでお捨てになったという内容です。「油注がれた者」とは、神の特別な務めを行うべく召された者です。それは、預

言者であり、祭司であり、王でした。さらにはイスラエルが、見えない神の御力をあらわす器として油注がれたと言えます。そして、私たちにとっては主イエスこそ、神に油を注がれた器です。そういうメシアが神に捨てられたという内容です。作者は、エルサレム神殿が、バビロン軍によって破壊され、廃墟になっっていることを嘆いています。こうして、第三巻が終わり、四巻に入ります。きよう開いています。詩篇100篇は第四巻にあります。第四巻の背景には、第二神殿が建設されていたという事実があります。神殿の再建工事は、ペルシヤの王クロス2世の勅令によって前536年に始まったものの、途中サマリヤ人の妨害に遭い、15年間ほど中断していました。ですが、ハガイやゼカリヤという預言者の働き、そして総督ゼルバベルの尽力により工事が再開され、前516年ないしは515年に完成しました。そういう第二神殿が詩篇第三巻の背景にあります。

二、表題に聴く

ところで、多くの詩篇に表題がありますが、表題はたいせつです。100篇には〈感謝の賛歌〉とあります。〈賛歌「ミズモール」〉は「楽器の伴奏に合わせて歌う歌」の意味です。古代イスラエルの神殿礼拝において楽器が使われるようになったのは第二神殿以降なので、詩篇100篇はエルサレムの第二神殿でうた

われていた賛美であると知ります。続いて〈感謝「トダー」〉ですが、感謝の犠牲をささげるといふ意味合いです。

三、詩篇100篇に聴く

1節を見てまいります。〈全地よ。主に向かつて喜びの声をあげよ。〉と呼びかけています。「イスラエルよ」ではありません。もつと広い意味です。「すべての造られたものよ。大地も木も、生けるものも、主に向かつて喜びの声をあげよ」という語りかけが聞こえてまいります。では、だれが呼びかけているのでしょうか。礼拝の司式者です。すなわち、神に仕える祭司たちでありましょう。私たちの時代に当てはめるなら、呼びかけておられるお方は、神であり、神の霊である聖霊です。神御自身が〈全地よ。主に向かつて喜びの声をあげよ〉と呼びかけておられます。その呼びかけている言葉の内容が2節です。〈喜びをもつて主に仕えよ。喜び歌いつつ御前に来たれ。〉と。これはおそらく、並行法という、一行目と二行目が対になっている表現法かと思われま。ここでは、二行目が一行目を発展させるかたちになっっています。すなわち〈喜びをもつて主に仕えよ〉とはどういうことか、それは〈喜び歌いつつ御前に来たれ〉なので

す。〈喜び歌いつつ御前に来たれ〉とは、礼拝です。私共が創造主なる神にできることは何でしょうか。いけにえをささ

さげることでしょうか。「賛美のいけにえ」という言葉がありますから、いけにえも必要です。ですが、自分自身の業績によって、神の恵みを勝ち取るようないけにえを、主は喜ばれません。私たちができることは何でしょうか。喜び歌いしつつ御前に進み行くこと、すなわち、礼拝です。古代イスラエルは礼拝において、かつて自分たちがエジプトで奴隷状態であったものの、主なる神の力強い御手によって救出されたことを、くり返しほめたたえました。私たちは、神が遣わされた救い主であり、神にして人であるイエス・キリストが、私たちが受けなければならぬ、義なる神からの罰を受けてくださったことによつて、罪赦されたことを感謝します。

〔途中省略〕

4節を見てまいります。〈感謝しつつ、主の門に、賛美しつつ、その大庭に、入れ。主に感謝し、御名をほめたたえよ。〉とあります。この聖句は、神殿があることを前提にしています。その神殿とは、通称「ゼルバベルの神殿」と言われる第二神殿です。4節は、2節の〈喜びをもつて主に仕えよ。喜び歌いつつ御前に来たれ。〉と重なります。そういうわけで、100篇は礼拝への招きの詩篇です。神はイスラエルに、自分から進んで礼拝をささげることが望まれました。同様に、私たち教会員に、自分から進んでささげる礼拝を望んでおられます。